**レッスン　1"A"**

**テーマ:生命一人間一生命現象**

**LIFEMl.WPD/EN/A**

私達の兄弟および姉妹であり,

スピリット､光､火の子供たちへ｡私たちは常に神､絶対､神の神聖さの中にいます｡

生命､人間､そして生命現象.三つの言葉､三つの意味｡非常に簡単な日常語です｡恐らく私たちはこれらの言葉,これらの簡単な意味についてゆっくり時間を費やして考えたことはなかったでしょう｡

　しかし､少し考え､問いを発してみると､これらの簡単な言葉と意味の背後に真理が隠されていることがわかるでしょう｡ユニークな真理､人間に関する真の現実､生命の源に関する真理です｡生命の源を認識すれば,その他全ては生命それ自体による創造であることがわかります｡それは生命の現象なのです｡

　それでは､人間とは何なのでしょうか?　人間もかつては動物であって,時間の経過によって動物から人間へと発達してきたのでしょうか？　ダーウィンの理論は正しいのでしょうか?　かつて人類は猿だったのであり､ゆっくりと発達することによって猿から人間になったという理論には真理が含まれているのでしょうか?　もしそれが本当なら,人間は死によって無に帰するのでしょうか?　永遠に塵から塵へ､灰から灰へと戻ってゆくのでしょうか?

　人間は時の始めから､そして時代を通じて､程度の差こそあれ自らのアイデンティティ

ー（自己）に関する探求を止めたことはありません。様々な哲学,様々な宗教を通じて人間は常に自らのアイデンティティーについて考え､追求してきました｡そのために､自分自身、周囲の自然環境、生命現象の創造､宇宙について熟考し､瞑想を続けてきました｡それらの探求のための道具は限られた五感と粗雑な肉体的頭脳という､貧しい認識でした｡人間は心に湧きあがる山ほどの疑問に対する答えを探し求め､理解と知識への渇きを癒そうと努力してきました｡

　偶像崇拝をしたり、半野生状態で､洞窟や木の上で一緒に生活した動物たちとさほど違っていなかったように見えた時代､火を起こす方法さえ知らなかった時代でも､人間は何かを求めて果てしなき空や広大な海を見つめていました｡自らの源と起源を探していたのです｡　人間は太陽を崇拝し､火を崇拝し､神を求め､生命の源を探し､生命それ自体を追求してきたのです｡そして考え､感情を感じ、喜びを感じ、悲しみを感じ、畏怖を感じ、周囲の環境に対して恐怖を感じました｡情操を体験しました｡人間の内側に神の光のスパーク､神の一部分･生命それ自体以外の何ものでもない本当の自己が存在していたのです。

　このスパークによって人間は動かされ､帰りの道､神の聖なるモナド(\*単子､単体)として出発した元の場所に帰る道へと導かれてきたのです｡

　人間と動物との違いを一つ挙げるとしたら､人間には考え,沈思黙考し､問いを発し､

答える能力があるのに､動物にはそのような機能がないと言えます｡動物は何百万年も生

きてきたのにもかかわらず､考え､沈思黙考する能力、論理性と感情、そして論理的思考

を形成する能力を達成した動物を見たことがありません。

　何故でしょうか?　動物には人間と似たような脳がないのでしょうか?勿論､動物にも脳

があります。

**しかし､人間は肉体的な脳で考えているのではありません。一般に知られている肉体としての脳の特質､能力によって沈思黙考するのではありません。**

　**瞑想と論理は、人間自身の源が神から発しているがゆえに与えられている特質なのです。**

人間はLife（生）それ自体の投影であり､それゆえに､その源が有する全ての特質を与えられているのです｡人間はそれらの特質を量的に有していないかもしれませんが､本質として有しているのです｡勿論､真剣に､深く沈思黙考したことのない人はそれを知りませんが､それでもいつか全ての人間がそれを知るようになるでしょう。現在のところ、真理を知る人はほんのわずかです｡

　キリスト自身も｢真理を知りなさい｡そうすれば、真理によってあなたは自由になるであろう｣と言っています｡あなたは何から自由になるのでしょうか?　現実、人間に関する真理、私たちが一体誰であり何であるのか、という真理に対する無知から自由になるのです。この質問に対する答えは、キリストの｢人間は神であり､神の息子であり、私たち全員が神であり神の息子である｣という言葉によって与えられています｡

　それゆえ､人間は神･絶対存在の息子であり､従って、息子は父の特質を有しています。私たちの父は神自身、生命それ自体であるので､神の子供である私たちが動物、創られた物であるということはおそらくありえません。神の子供が鉱物､植物､動物などのような創造物､可視及び不可視の宇宙のような絶対存在による全ての創造物のような存在であるはずがありえません｡それらの創造物は､人間が様々な世界の中で経験をつむことができるように、神の息子である人間のためにあるのです。多くの世界があるので、ここで私たちは様々な世界と言います｡

　一般に知られている粗雑な物質世界の他に､サイキカル界（＊感情の世界）､ノエティカル界(＊思考の世界)その他がありますが､今ここでは述べません｡　死に面して人間が粗雑な物質世界から去る時、無に帰してしまうのではなく、サイキカル界、ノエティカル界に入り、そこでさらに経験を積むのです｡

　すると当然,次のような疑問がでてきます。人間は永久にこれらの世界にとどまるのだろうか?　勿論、そうではありません｡人間は以前にいた粗雑な物質世界に戻ってきます。人間は何度も､何度も戻ってきて肉体をまとい､経験を経て学びを完了したら最後には元の源に戻ります｡聖パウロは｢滅びるものは不滅の衣をまとわねばならず､死すべきものは不死を身にまとうであろう｣と述べています。人間は元の生命の場所に帰るのです｡

それでは､しばらく話題を変えて植物界､動物界の特質を見てみましょう｡私たちはあらゆるものが法則、一定の調和によって支配されているのを知っています。木々や動物の成長には英知が働いていると主張することでしょう｡生命現象にはサイクルが認められ､小さな穀物の粒、木の種の中には元々の可能性と蓋然性の全サイクルをみることができます｡あらゆる所､あらゆる生命現象において､程度の差こそあれ､完全なる英知､パワー､完全なる善の存在を証明するものを認め､理解することでしょう｡

　これを自然と呼ぶ人もいますが、自然とは何でしょうか?　もしこの言葉の中に絶対知性､絶対存在､あるいは神の存在を認めるならば、どのような言葉を用いようと問題ではありません｡あらゆる生命現象の背後,つまり生命が表現されている所、あるいは活動とエネルギーが現れている所には､必ず完全なる英知､完全なるパワー､完全なる善と絶対存在が共存しています｡

　今日､人間が家であれ、機械であれ､宇宙船であれ何かを建造するプロセスにおいて、沈思黙考が要求されます｡論理が必要となり､パワーとエネルギーの働きが必要となります｡

　人間が良く知っている物質世界､無数の星､太陽系、銀河、銀河系システムを考えてください｡それら全てが宇宙を支配する法則から一瞬たりとも外れることなく存在し､維持され、驚くべき速度で動いているのをみれば､それら全ての創造物が無から創造されたかもしれないと信じるのは的を得ていないと考えられるでしょう｡

　超知性が存在すると信じるのを拒否することは納得できません｡超知性という言葉は非常に不適切ですが､それでも全ての人が理解可能な内容を表現するには言葉を使わざるをえません｡時間と空間の意味を越えた、宇宙を創造した絶対英知､絶対パワーを有する絶対存在に属する超知性｡

　過去において､これらの偉大な真理について深く考え､苦闘した人々が、この地球上のいろいろな時代、様々な場所に生きていました｡深い瞑想とエクスタシーに満ちた体験を通じ､可視及び不可視の宇宙を包みこむ絶対的英知について他の人々よりも真理に近づいた人々がいました｡彼らは明確な意識と共にサイキカル(\*感情的) ､及びノエテイカル (\*思考的)な世界、さらにそれより上位の世界に生きていました｡

　現代においても､そのような体験を伴った人々が生きていますが､その数はわずかです｡従って、これまでに語られてきたことは､サイコノエテイカル(\*感情・思考的)な上昇によって偉大なエクスタシー体験を生きた人々､そのような師の実際的体験からもたらされたものです｡

　古代哲学､様々な神秘家、古代エジプトや古代ギリシャの神託を告げた賢者たち､さらに時代を下って仏陀､チベットのラマ､モハメッドといったパーソナリティーを知っていると思います｡彼らは生命に関する真理を教えてきました。彼らは当時の人々のサイコノエテイカルなレベルに合わせて､それぞれの方法で真理を教えてきました｡

　ここで､以下のことを明確にしましょう｡まず､ここまで説明してきた信念は、あなたの宗教あるいは他のいかなる真摯な信念に反対するものではありません｡それどころか､真理に関する書物を深く､深い瞑想と共に学んでゆくと、キリストが生きていた時に述べたことと一致するでしょう｡

　キリストはたとえ話によって､当時の人々の発達段階と理解力に合わせて教えていました｡私たち全員に人間･神･創造に関するあらゆる真理と現実を教えてきました｡エジプト、ペルシャ､ギリシャ、ローマ等様々な文明において発達した神話は前キリスト時代のキリスト教と言うことができます｡なぜなら､そこにはそれらの偉大な真理が込められているからです｡

また､これまでに述べてきたことだけに基づいて､これらの真理を受け入れるように期待するのは論理的でもなければ､正しい事でもありません。　しかし､メッセージは伝えられたので、時間を設けて自分自身及び生命について学び､問いを発し、瞑想し､自然界の調和に注意を向け､エゴなしに宇宙の偉大さに目を転じざるを得ないでしょう｡そうしなさい｡そうすれば、**あなたの本当の自己､神としての人間、あらゆる人間を照らす光があなたを刺激し､次第に神があなたの内側にいることが信念､否定しがたい信仰､そして後には恐らく体験を通じて明らかになるでしょう｡**

　あなたが誰であり､何であるかに対する答えが得られるでしょう｡すると､死というものが実際には存在せず、人間があまり執着すべきではない物質以外にも、かっていたことのある他の世界､他の天国を楽しめるということがわかるでしょう｡

こういったからといって､私たちが社会における義務を放棄したり､苦行者、世捨て人になるために物質的なものを捨てるという意味ではありません｡物質にはそれ自体の魅力があります｡なぜなら､それも神の創造物であり､私たちはそれを楽しむ事が許されているからです｡しかし､物質の奴隷になったり､それに溺れてはいけません｡反対に、いくらかの努力をし､探求と真摯な興味を通じて､サイコノエテイカルな成長を目指すべきです｡私たちは生命､人間､創造に関する真理の知識を目指すべきです｡肉体的健康、感情的平安、そしてメンタル的（＊思考面の）な静けさを取り戻す事によって幸福を見いだす事ができます｡そうすれば、物質世界において現代の天国を築く事ができ、それによって他の世界の天国をも築く事ができるのです｡

私たちは常に神､絶対,神の神聖さの中にいます｡

EREVNA/LIFEMI.WPD."A"SERIES IA/ 4 END

\* (訳者より) psychical (サイキカル)及びnoetical (ノエテイカル) ､ psychonoetical　(サイコノエテイカル)という言葉が頻繁に出てきますが､ psychicalは感情的なものを　意味し,いわゆるアストラルの世界に通じ､ noeticalはその上のメンタル界を意味し､psychonoeticalはその両方を意味します｡人間には肉体、サイキカル体､　そしてノエティカル体という三つの体があり、それら三つが人間のパーソナリティーを形成しています｡